

東アジアにおいては古代より、中央集権的な国家統治がその政治的手段として支配地域の地図と土地台帳を官庫に収納する伝統があったことが知られている。江戸幕府はその治世260余年の間に数次にわたって全国68カ国(この場合、「国」とは大和国や武蔵国といった我が国古来の地域的単位を指す)の巨大な「国絵図」を作成させた。幕府に集められた正本の多くは失われたが一部は国立公文書館に保管され、また、諸国大名が国元に保管していた控(ないし写)、幕府担当者へ下調べを願い出た伺い図、作成過程に当てられた下絵図などが各地の文書館等に残されている。国絵図は、そこに盛られた地誌情報、独特の表現様式、狩野派の絵師らによる凝った造り、そして縦横数メートルにも及ぶ大きさゆえに研究者の関心を引き、国絵図研究会等による研究が重ねられてきたが(『国絵図の世界』(国絵図研究会、2005年)、まさにその巨大さゆえに個人による調査が困難な対象でもある。

報告者は、国絵図など日本前近代地図を研究対象とする科研費プロジェクト「地図史料学の構築」(2006?2008年)、「『地図史料学の構築』の新展開」(2009?2011年)(研究代表者:杉本史子東京大学史料編纂所教授)に連携研究者として参加し、国絵図の学際的な共同調査の現場に立ち会う機会を得た。報告者はこれまで主に発展途上国を研究対象としつつ様々な地域や状況における読み書きの研究を行ってきたが、日本史研究の実績は無い。地図史料学プロジェクトで研究代表者の杉本より報告者に期待された役割は、国絵図や関連する歴史文書の調査や分析ではなく、様々な分野の専門家が関わる共同調査の展開をモニターすることであった。実際、地図であり行政文書であり政治的駆け引きの産物であり工芸品でもあり、しかも巨大という国絵図の調査には、その多面性に引き寄せられるように、絵図に造詣の深い日本史研究者に加えて、江戸期の和算や測量を専門とする科学史家、人文地理学者、色材分析の専門家たちが加わっていた。さらに、調査の後半では日本画保存修復の専門家による元禄備前国絵図(原寸=316 cm x 357 cm、岡山大学付属図書館池田文庫所蔵)の、実験実証を目的としたできるだけ原本に近い材料を用いた原寸大の復元制作も行われた。

多様な視線や作業が交錯する調査中、メンバー同士で時には手を差し伸べつつ、また時には国絵図の縁に並び立ちつつ様々な意見交換が行われたが、「こんな共同調査が実現したのも、国絵図の大きさゆえのことであろう」というのが参加メンバー一同の感想である。もう少し丁寧にいえば、国絵図は、同時に作業するには十分に大きく、互いの作業を意識するにはほどよい近さを生み出すようなサイズの史料であった。こうして、報告者は、多様な分野の専門家が国絵図という稀有な研究資源を文字通り「取り囲み」、それぞれの分野固有の道具や技を駆使して新しい知見を引き出しあう現場に立ち会うことができたのである。

地図史料学プロジェクトは2012年3月をもっていったん終了し、現在、各メンバーが個別また共著で成果を報告しつつある。報告者は、主要メンバーが重なる後継研究プロジェクトにも参加しているが、国絵図調査で実現した多様な専門的アプローチの緩やかな連携は他の学際的なプロジェクトにとっても有意義な事例となると考え、あえて「終わった学際プロジェクトの自己評価」を進めている。地図史料学プロジェクトの成果が出そろうまであと1、2年はかかると思われるが、現在、これまでに公表された論文を踏まえつつ主要メンバーとの総括討論の機会を設けて意見交換を行っているところである。

今回は継続中の調査の中間報告として、歴史的調査・科学分析・復元制作の三分野の専門家が関わった元禄備前国絵図調査に焦点を合わせて、専門分野ごとのアプローチの多様性、相互依存性、成果の共有などについて報告を行った。